

14.5

叢

14.5-397



1200501216909

科第二十五號

十年五月

最近歐羅巴の事情

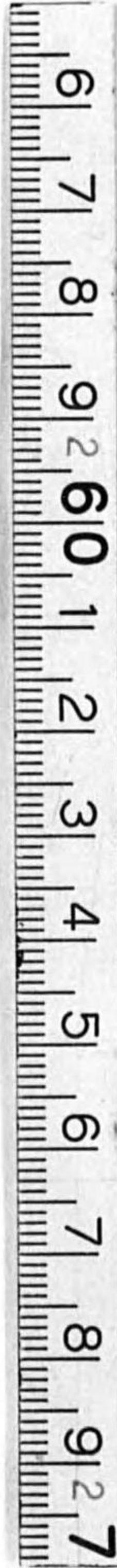
— 米田實氏述 —

立憲民政黨
政務調査館

叢A
76
25

10.6.20

東京商工會議所



始



145
397

叢A
76
25

本編は法學博士米田實氏が昭和十年四月十六日當所定例午餐會に於て試みられたる講演の要旨である。

昭和十年五月



81W27190

最近歐羅巴の事情

——米田實氏述——

東京商工會議所

今日は獨逸の動きから起りました歐羅巴の事情を申し上げます、其外歐羅巴の伊太利等の動き露西亞問題から日本に及ぼす關係等も申し上げたいと思ひます。

御承知の通り先月の十六日獨逸が例のベルサイユ媾和條約を無視しまして大に陸軍を造る、海軍を造る空軍を造ると云ふことにしまして其聲明をしましたのが、きっかけになりましたそれから佛蘭西が中心になつて起りまして伊太利に話し、英吉利に話し、丁度最近本月の十一日から十三日迄、先週の土曜日迄例のストレーザ會議、マジヨールと云ふ湖水の中の島で以て伊太利と佛蘭西と英吉利の會議がありました、併し是も實は本當にまだ纏まらぬのであります、此結果として更に獨逸、露西亞と又ポーランドの三つの國を呼んで六國會議を近く開くと云ふので、それで本當に纏まるか纏まらぬか判らうと思ふのであります、ストレーザ會議は形だけで問題は決つて居ない、それでさう云ふ風に三國會議が六國會議を催すといふことに伸展して居ります、もう一つは獨逸の動きも御座いまして埃太

利問題といふものが御座います、中央歐羅巴の問題です、之が場合に依つて歐州の均勢を動かす、之に關連致しましてバルカンの國々が寄つて、尤も英吉利は加はりませぬが、佛蘭西も伊太利も之に加はりましてさうしてダニユープ會議を開く、是は來月の二十日に開かれます、もう一つは今回の獨逸の動きに依つては、どうも國際會議等は纏まるとしても、萬一の用意とでも申しませうか露西亞と佛蘭西が目下相談中で、露西亞と佛蘭西は一朝侵略をする國があつたら、互に助合うといふ話をして居つたのですが、それを五月一日迄に本當に文章にする、條約を造る、此三つの問題が起つて居る、即ち六國會議を開く、伊太利、佛蘭西、英吉利、獨逸、露西亞の五大國とそれにポーランドを加へて六國會議であります、もう一つは佛蘭西方面からダニユープ河一體の國々、それに佛蘭西も伊太利も獨逸も加はつて會議をする、もの一つは露西亞と佛蘭西が國際會議では不安ですから我々は侵略する者があつたら互に助け合ふと云ふ話をはつきり文章に書いてしまふ、五月一日迄にやる、斯う云ふ三つのことが起つて居るのであります。

就きましては私は茲に獨逸の最近の動きを申し上げますが、ヒットラーと云ふ人は御承知の通り大正八年のベルサイユ條約には非常に不満でありました、獨逸のみに罪はない、然るに獨逸のみ罪だといつて領土を取つた、之も不當だ、軍備其他を制限して極端に決めた、是も不當だ、因つてベルサイユ條約を破壊しやう、改正を求めると云ふのが主張であります、それで彼が始めあゝ云ふ團體を造つた

のは大正八年でベルサイユ會議あつたあとで六名の有志が寄りました、是は始めは五人丈けであつたが最後に這入つたのがヒットラーであります、其時に六名で以て今のナチス黨の基を造つた、それが間もなく十二名となつた、それが翌年には百名となつた、即ち大正九年には百名と殖へた、さうして大正十年には五千人になつたと云ふのですから非常に進んだ譯です、其ヒットラーの説いた最初の主張は二つある、それは澤山ございますが、外交の問題で重大なものは二つであります、それはベルサイユ條約を修正する、何處に居るを問はず獨逸民族を統一して大獨逸を作らう、此二つが最も顯著なるものであります、ベルサイユ平和條約を改正する、今迄戦争の和睦條約を改正すると云ふことはありませぬ、媾和條約を實行することになつて、あとからそれを無暗に改正されては堪らない、是は大變なことです、實に亂暴な話です、彼はさう云ふ綱領を造つたが、其他の條項を書足しまして天下に發表した、其運動が續いて居つた、それが獨逸國民の人氣を得たのは其一部が出来た爲めであり、彼が天下の政權を握るに至らんとする時、議會では大多數であつたが未だ政權がない時出来たのが例の賠償協定の條約だ、御承知の通り獨逸は戦争の結果巨額の賠償金を出すことになつて居た又拂つても居たが、結局其賠償金は向うでも許して呉れて安くしましたが、六百六十億圓拂ふ、一千三百二十億馬克拂ふべきこと、斯うなつて居た、所が御承知の通り世界經濟界の問題もありましたし獨逸の勞力問題もありましたし種々の事情がありまして賠償金を拂うと云ふ主義が丁度昭和七年に於て破壊さ

れた、御承知の通り夫れ迄は日本にも相當拂つたのでありますが、一千九百八十萬圓ですか、日本に拂つた、それで之は前は特別會計でやつたのですが、若槻さんの時に財政が足りなくなつて之を一般會計に繰入れた、それから續いて拂つて呉れるだらうと考へて喜んで居つたら、もう拂つて呉れない、其外に日本に對しては船舶が二百九十八萬圓、太平洋丸、吉野丸、功運丸といったやうな船です、それから染料が三百萬圓、自動車が五十萬圓、本が五萬圓、それを拂つて貰つた、所がそれが最後でもうそれから一文も取れない、外の國ももうそれからは賠償金は取れない、それは昭和七年のローザンヌの會議の時英國が戦債を負けて貰うといふ條件に於て獨逸から取らぬと決めた、けれども米國は負けない、現在では獨逸は拂はぬ、少つとも拂つて居ない、そこで獨逸國民は平和條約を改正すること出来ない、出来ぬあれは無茶なことを言ふのだと思つた連中も之はいくど、此やり方は出来るぞ、斯う考へ直しましてヒットラーの信用が餘程高まつた、賠償條約媾和條約の中には拂へと云ふ丈で金額などは決つて居ない、賠償問題は第一に行はないとなつたので國民の熱が高まつた、其翌年一月即ち一昨年一月に彼は非常な人氣を得まして獨逸の大宰相となりました、すると今度は彼は賠償問題はやらぬと云ふ自分の主張が通つたから今度は外の問題をやらうと云ふので、所謂條約を無視し、結局廢止すると云ふ考へでやつた譯であります、其外交はあつちこつちやつて居るので込入つて居ります、先づ第一に軍備を擴張して戦前と同様の力を持つ、前通り領土を取戻す、大獨逸民族、之を實現

する、斯う云ふ問題に力を入れた譯であります、さうして種々用意をして、其用意は非常に詳細に亘つたものであります、其結果遂に先月、三月の十二日ですか、飛行隊を置くこと、先づ之を聲明した、飛行隊は媾和條約で禁ぜられて居ります、獨逸は飛行隊を置いてはならぬ、それを準備して居つたのです、造つて居つたのですそれは民間の飛行協會といふ名前を以て準備して居つた、どん／＼造つて居つた、それを今度オフヒシアルにしたのです、是は餘談ですが、日本にも獨逸の飛行將校が新聞記者といふ名前をやつて来てあつちこつち歩いて居つた、それが三月にさう云ふことになる、今度は飛行將校と稱した、此間迄の新聞記者は今も飛行將校となつて方々を歩いた、是は日本の飛行機の状態を調べに來たのですが、實は獨逸の飛行協會の連中です、それが急に兵隊になつた、さう云ふ状態であります、是が始めであります、さうして後三月十六日になつて何をヒットラーが聲明したかと云ふと、現在獨逸の陸軍は十萬、さうして徴兵は禁止であります、武器の製造は出来ませぬ、それでどうしたかと云ふと、三月十六日の聲明は其徴兵を復興する、元との通りに徴兵を實行すると云ふことを聲明した、是も條約違反です、條約無視です、今では十萬ですが、今度は其數ははつきり言悪いですが、五十萬にしやう、十萬の兵隊を五十萬にしやう、表向きはどう云ふのかと云ふと、十二軍團、三十六師團にする、それは數に付ては大分議論がありませう、始めは九千人の師團にして三十二萬四千人にしやうと云ふ考へであつた、之は段々擴張して行つて五十萬になることは無論でせう、陸軍を五

十萬にするが海軍はと云ふと、唯今は十萬噸しかない、今度はそれを四十萬噸にする、四倍にする、飛行機はと云ふと禁ぜられて居たものを今度は英吉利と同様にやらうと云ふのである、併し是も實は造つて居たのです、さう云ふ聲明をしたので、之に皆驚きまして、どうも國と國との條約を改正せずにはさう云ふことを實行するのは亂暴だと云ふので問題になつた、所が獨逸がさう云ふことをやつた原因と申しますると、第一は佛蘭西を馬鹿にして居る、それは佛蘭西が最近餘程弱點を現はして居る、其弱點を獨逸が見まして今度は佛蘭西に重きを置かぬやうな點が御座います、どう云ふことかと云ふと佛蘭西には兵數から云ふと、佛蘭西の兵隊は是も數字は色々申しますが大體五十六萬、獨逸の十萬に對して佛蘭西は五十六萬であつた、併しそれは植民地に二十萬ばかり居ますから、先づ三十幾萬しか本國には居ない、ですから獨逸から云ふと今度造る兵數は佛蘭西本國の數よりも多いか知らぬ、少くなくとも平等、或は多いか知らぬ、さう云ふ程度で御聽きを願ひたいのですが、それを一番獨逸が馬鹿にした點は佛蘭西は御承知の通り昔から腐敗事件が多い、丁度一八七〇年明治三年ナポレオン三世の時の普佛戰爭、あの戰爭に負けましたが、其原因は色々あると思ひますが、其時は彈藥が餘り役に立たなかつた腐敗があつて役に立たなかつたと申します、其後にパナマ運河會社が佛蘭西に依つて造られた所、是はパナマ運河に這入つて居つた其技師が腐敗事件から罷めた、到頭亞米利加へ賣つてしまつた、最近はと云ふと丁度一九三〇年頃ですが、あとから／＼腐敗事件が續いた、此腐敗は政治家

が策士と結託しまして市債を造る、政治家が關係して東京市債のやうなものを造る、さう云ふことはこつそりとやるのはあるけれども、さう云ふものが結託して居ると云ふやうなことは餘り外にはない、佛蘭西にはそれがある、一番悪い點は一昨年頃から起つた例のスタビレキ事件で、策士が大臣の紹介で悪い事をして居つた、それで昨年二月巴里に於て此事件に就きまして最も反對が御座いました、暴動迄起つた、政治家の不信用と云ふことになつた、それは其時分から問題になつて居つたことは此調子であると佛蘭西の國防、例へば獨逸と佛蘭西の國境に於ける砲臺のやうなものは役に立たぬではないか、表は大變宜い様だが駄目だらうと云ふ疑が佛蘭西の愛國心の強い人の間に起つた、最近一九三〇年來此四五年といふものは腐敗事件の繼續であつた、それで疑が佛蘭西國民の間に相當高まつた、之は本にさへ出て居る位ですから、獨逸の方の新聞雜誌に是が一層やかましく言はれた、佛蘭西人自身が疑うて居た、それでさう云ふ状態ならば目下佛蘭西は金力も相當にあるし、金貨に於ても世界第二の金貨を持つて居る國であるし隨つて形は宜しい譯であるが、形は如何に宜くても内容は駄目だ、斯う云ふ風な見方は佛蘭西人の中にもありませんが、是が獨逸をして一つやつて見やう、構はぬではないか斯う云ふ空氣を造つた原因と思ひます、獨逸にはさう云ふことを書いたパンフレット式のものゝ廻つて居ります、それが一つ、第二は英吉利であります。

英吉利はどう云ふ風な見方をして來たかと云ふと一昨年頃はさうでなかつたけれども段々獨逸の狀

態が分つて来た、獨逸が軍備をやつた状態を知つて居る、其状態が分つて来ると、是はどうも遺憾であるけれども此儘にしては駄目だ、獨逸は恰も熱し切つた蒸汽機關だ、蒸汽の出口を付けるにあらざれば爆發する、斯う云ふ見方を英吉利がした、英吉利人は何でも仲々ゆるやかにやる國民で、段々さう云ふ風になつて来た、一昨年頃はさうでなかつたが段々少し宛變つて来た、此状態を獨逸は能く知つて居る、色々人を獨逸から送つたり、英吉利からも人が來たりしまして、最近ルシアン卿といふ人が獨逸へ來まして、獨逸と英吉利との裏面外交をやつた、表へは現はれない、此獨逸の出した案は英吉利は最も注意する、日本が朝鮮に重きを置くやうに、英國の向側の佛蘭西、白耳義、和蘭、此地帯は侵さぬ、佛蘭西の海岸も侵さぬ斯うしたら陸軍はうんと持ちたい、海軍は英吉利の三分の一にする斯う云ふ話をした、それですら英吉利は始終承知してやつて居る、獨逸は佛蘭西を馬鹿にして居る、英吉利はまあ大したことはせぬだらう、今獨逸の爆發を救う爲めには出口を造らぬと駄目だといふやうに見て居る、さう云ふ點が急に獨逸を活動さしたる原因の第二であります。

第三は獨逸は今言ふやうに大體造つて居る、現在持つて居るものはどの位かと云ふと、我々は最初ナチス隊が八十萬居る、警察隊が十八萬居る、そんなことを算盤に入れて想像したが、さうでない、本當に現役として使ふやうな軍隊はもう三十個師團出來て居る、三十個師團と云ふと、今の三十六師團と云ふ所に三十個師團出來て居るからあとは僅かだ、もう出來たといつても宜い位だ、飛行機はと云

ふと、造つてはならぬと云ふ獨逸が本年の夏頃には六百か七百造つて居るのです、之は前から言はれて居る、少し大きく言ふと千持つて居ると云ふ、昨年の末に飛行機は千あつた、飛行機に關係ある人員は四千人、斯う云ふ數字が出て居る、それ故に今年の二月頃佛蘭西の或將軍が發表して居る所に依りますると今年の春には千五百あるといつて居る、唯今世界の國の國々が軍用飛行機を持つて居るのは露西亞が三千、佛蘭西三千、英吉利が一千、伊太利は千五百あるやうです、尤も佛蘭西の三千の中には古いのがあつて代へるさうですが、最近六千八百萬法の改良費を出して居りますが、佛蘭西は兎に角三千持つて居る、獨逸は大體伊太利に近い數を持つて居る、もう持つてしまつて居る以上は破壊することは出来ない、ですから此持つて居ると云ふことが原因で、持つて居るから仕様がなないではないか、斯う云ふ強き主張が御座いましてやつた、所がそれに對しまして佛蘭西其他はどう云ふ立場になつたかと申しますると、佛蘭西は御承知の通り獨逸が三十個師團持つて居るとすれば兵力は相似て居る、併し斯うなつて来ると獨逸の人口は六千五百萬、佛蘭西は人口四千萬です、戰爭最中に佛蘭西は兵隊に男の三分の一を出した、七百萬人出した、佛蘭西は人口四千萬の中二千萬は男であります、其三分の一、七百萬人出した、男といつても中には子供もあり老人もありますから、それを引きますると青年男子は半分減つた、佛蘭西は非常に兵隊の供給に苦んだ、獨逸に對して十萬の常備軍に制限し武器を造ることを禁じ其上ライン河近邊の獨逸の軍備の撤廢を命じたなど、云ふも詰り佛蘭西の

兵力の供給の能力が足らぬからだ、何しろ青年男子は半分になつた、全體の男子の三分の一になつて居る、是が佛蘭西の非常な心配の種で、どうかして獨逸を押へなければならぬと云ふことが佛蘭西の政略になつて居るですから今獨逸が兵を殖やして來ると非常に困る、何とかして之を止めなければならぬと云ふのが佛蘭西の立場であります、所が其以外に問題となるのは獨逸が外交上に活動しまして新しく土地を取る、それはどう云ふ所を取るかと云ふと、唯今獨逸の外交家が主として目を着けて居るのは何といつても奥太利であります、戦争で取られたのはポーランドの大部分、東の方を取られました、最近獨逸はポーランドと特殊外交で妥協して居る、是は露西亞に關することであり、ヒツトラーは利巧者であります、此方は延して居るのです、さうして主としてやらうと云ふのは奥太利です、と云ふのは獨逸は人口六千五百萬、所が奥太利を合併すると人口七千百萬となる、奥太利は六百萬の人口ですから併せると七千百萬の國になる、何といつても奥太利を合併するのが一番必要だ、斯う獨逸は見て居るポーランドの方も從來獨逸の持つて居つた土地だが、之を回復するのは第二段で宜い、露西亞との問題が重大である、之は後に延して宜い、斯う見て先づ奥太利へ目を着けた、さうすると佛蘭西から云ふと今でも獨逸は六千五百萬、自分は四千萬、人口では話にならぬ、それが若し獨逸が人口七千萬を超へると愈々戦争等の場合には非常に困難になるから是はどうしても渡してはならぬ、飽まで之を妨げるさうして獨逸の軍備擴張を許さない、斯う云ふ立場であります、もう一つの間

題は獨逸から考へて居る點はチェッコスロバキアであります、此チェッコスロバキアは御承知の通り日本にも厄介になつて獨立した國です、今の外務大臣に頼まれて力をかしてやつたのですが、あの國は民族主義で獨立したのですが、如何にも經濟上立行かない、經濟上立行く爲めには物資なかるべからずと云ふ譯でありまして、此民族的に國を造つたチェッコスロバキアが獨逸國民三百萬人居る所、是は奥太利に屬するか、獨逸に屬するか、兎に角三百萬人居る所のボヘミヤの一部で、鐵あり、森林あり、物資の裕かなる廣汎なる地帯をずつと取つた、それでチェッコスロバキアから云ふと此爲めに財政が極めて宜くて、戦争後何處も財政は困難だが此新しい國のみ獨り財政が宜い、従つて金があるから大に外交にも活動をしました、それで獨逸としては奥太利合併が第一、第二は此ボヘミヤの一部を取返したい、獨逸も物資が欲しい、さう云ふ活動をやつて居つたのですが、若しそれが實行されば佛蘭西は困る、獨逸が盛んになるやうなことはどうしても止めなければならぬ、是が佛蘭西の立場であります、併し佛蘭西が如何に心配してももう今日となつては絶対に獨逸の軍備を止める譯にはいかぬ、英吉利が今のやうな態度ですから頼むに足らぬ、そこで獨逸に對する佛蘭西の外交は獨逸の軍備の氣勢を緩和して、獨逸の軍備を今より多くさせやう、或程度迄擴張させやう、其代り獨逸をして侵略させぬと云ふことの約束をする、現在獨逸を除く列強の間にはさう云ふ約束が出来て居る、ライン地帯に侵略せぬと云ふ約束して居るから、それに東の奥太利の方面を加へて、南の方も加へて、此方面に無

理はせぬ、侵略はせぬ、國際紛争は平和の手段に依つて解決すると約束した、同時に誰か一つの亂暴をするならば皆寄つて群つて戦はうではないか、相互援助の約束が出来て居る、之に獨逸が應ずるならば佛蘭西は多少獨逸の軍備の擴張を許してやつても宜い、さうすれば他の國を取ることは出来なくなるから、斯う云ふ建前にある、所が獨逸は之に對してどう云ふ態度を執つたかと云ふと不侵略と云ふことは承知しやう、併ながら助合はしない、例へば誰が何處かを侵略しやうとしても夫れに對して制裁を加へる爲めに武力を用ひることはしない、是が獨逸のこすい所であります、御承知の通り佛蘭西としては完全な自衛權を得たい、不侵略と云ふだけでは十分でない、それで侵略國には皆一緒になつて制裁を加へる、其協定を重ねて居る、ですから獨逸は最近不侵略の約束はしやう、併し侵略したものに對して制裁を加へて助合うといふことはせぬ、自分もせぬが人もせぬ、であるから不侵略の約束をしましても自衛權と云ふ點にはそこに餘地を残して居る、侵略者に制裁を加へることはやらないと云ふ抜け道を造つて妥協しやうとして居る、佛蘭西は之に對しては同意は出来なないと思ひます、今後會議はどうなりますか、注意を要すると思ひます、所が今度は露西亞です、露西亞も此獨逸のことは非常に心配だ、何故かと云ふと最近に露西亞とポーランドが急に仲が宜くなつた、従前はと云ふと御承知の通りポーランドは西の方は獨逸の領土を取り東に於ては露西亞の土地を取りましてさうして出來た國であります、故に獨逸とも仲が悪い、露西亞とも悪かつた、あの國は人口三千萬の國ですが、

極端な金を使つて軍備擴張をやつた、社會黨が軍備擴張を盛んにやつて居つた、さう云ふ國でございます、是が獨逸と一時悪うございまして佛蘭西と提携して獨逸を押へて居つた、佛蘭西はポーランドを大きくする爲めにチェッコスロバキアと同じやうに之を支持し、ポーランドが民族主義で國が出来ると財政困難で倒れては困るからと云ふので佛蘭西が色々世話をしてポーランドの領土を全たからしめた、何しろ露西亞も土地を取られた、獨逸も取られた、民族主義で出來た國といつても三千萬の中千七百萬人がポーランド人で、あとは露西亞と獨逸人であります、所が佛蘭西は獨逸の動きに非常に心配し出した、獨逸が軍備をやつて居ることを知つて居る、それで用心深く考へまして昨年御承知の通り佛蘭西は露西亞へ手入をした、今迄はポーランド、チェッコスロバキアを味方にして獨逸へ對抗して其後ろへ垣を造る、此鎖で以て獨逸の前後を押へた、詰り獨逸の番犬だ、所が此番犬は小さいから役に立たぬ、獨逸の軍備擴張を心配しまして昨年の春から露西亞と提携したのであります、すると妙なものでありますして今迄ポーランドは佛蘭西と仲宜くして居たのですが、此大きな露西亞と提携したのに焼餅をやいて佛蘭西と離れましてポーランドは獨逸に付くやうになつた、三月十六日の聲明問題はポーランドでは喜んで居る、斯う云ふ状態で、どう云ふやうに接近を齎したかと云ふと、ポーランドと獨逸の間に協商が出来た、之は獨逸の政府がはつきりやつたのか、どうか、大分問題でありますけれども、獨逸の大臣とポーランドの大臣がやつた、是は確かであります、ポーランドは密か

に代表員を送つてやつた、さうして跡は知らぬ顔をして居るから能く分りませぬけれども、外務大臣は皆承知して居る、あとで否認するか知れませぬ、どう云ふことかと云ふと獨逸はポーランドの現に持つて居る土地を取戻したいのだが、其中の上シレシヤ地帯の石炭を取つて、是は大正九年に人民投票でポーランドに分割したのだが、之をポーランドは獨逸に渡さう、其代りポーランドは獨逸と提携して露西亞の南ウクライナ、あすこは石炭の産地であります、其地帯全體をポーランドが取らうと云ふ話、是は表向きは否認して居るのもありますけれども兎に角ポーランドと獨逸は策士の國であります、ブランの國である、陰謀の國である、斯う云ふ國の提携が何處迄出来るか分らぬが、今は仲が宜くなつて居る、それで大に驚いたのは露西亞であります、露西亞には相當軍備はありますけれども獨逸とポーランドが手を握つて來ると云ふので、殊に南のウクライナの地帯は著く獨逸の資本のうんと這入つた所であります、ポーランドはどうかと云ふと、露西亞の領土であつた時分から電車等交通機關は皆獨逸の資本でありまして、ポーランドと獨逸と近付くべき事情は幾らもある、色々な關係がありますから是が提携すれば露西亞は非常に困る、殊に復興經濟をやつて居る露西亞としては此儘では置かれぬと云ふので佛蘭西に近寄る、是が最近の露西亞です。

所が次は之に對して伊太利と英吉利はどう云ふ態度であるかと云ふと、伊太利は是は従前は獨逸に悪くなかつた、此獨逸と伊太利とは國境はなかつた、中に瑞西が挟まつて居る、だから心配は要らぬ

から仲が宜い、所が獨逸が奧太利に對して合併を企てると人口七千百萬の國になる、伊太利は危い、何故かと云ふと自分の國は佛蘭西同様人口は四千萬の國でありまして、人口七千百萬の國が隣になつては危い、喧嘩したら負けますから、それで伊太利は奧太利の問題が起つて來てからは獨逸と悪くなつて來た、其間に乘じまして外交をやつたのが佛蘭西であります、佛蘭西はと云ふと伊太利と此點が似て居るので是れと妥協して行けば都合が宜い、それに斯う云ふことがある、それは阿弗利加方面に關することですが、丁度大正四年に伊太利を戰爭に引入れました時に、佛蘭西と英吉利と露西亞が話をしまして決めたことは若し將來英吉利と佛蘭西が阿弗利加に於て土地を取る時は伊太利にも領土をやる、是は倫敦秘密條約となつて居る、大正四年二月十六日に決めた條約である、即ち戰爭が終つたらお前にも阿弗利加の領土をやる、と云ふ約束をした、所が戰爭が済みますると英吉利は聯盟委任統治の名に於て面積九十八萬方哩、佛蘭西は二十四萬方哩の土地を取つた、伊太利は少しも取れなかつた、そこで伊太利は非常に憤慨して會議に於て涙を飲んでやかましく言ひました、又ウキルソン大統領にやかましく言つた、するとウキルソンが言ふには倫敦秘密條約と言ふが、あなた方三四國だけの約束で私は知らぬ、斯う云ふ世界的の會議にさう云ふことを持出すのは無理ではないか、私は知らぬ、そこで伊太利は困りまして今度は佛蘭西と英吉利に直接談判をした、之は其後に英吉利と伊太利の話は付きましたが佛蘭西とはどうしても付かない、佛蘭西は地中海の向うで北阿弗利加に領土を持つて

居ります、之を伊太利にやらなければならぬ、そこで例のムツソリニーが政權を執つた後、非常に活動して談判をして居りました所が、今度佛蘭西は獨逸の問題で、阿弗利加をやりたくないけれども、此方の方が一層重大な問題だと云ふ譯で、本年の一月七日に御承知の通り此リビヤの南に於て四萬七八千方哩の土地を伊太利に譲つた、それである時の話を清算しやう、次はエチオピア即ちアビシニヤですが、あすこは嘗て伊太利が自分の保護領の様に居つた所であり、それを一八九六年三月二十九日の戦争で伊太利がエチオピアに負けました、さうして以來チオエピアは獨立國になつた、其間佛蘭西はあすこへどん／＼這入り込んだ、所が今度佛蘭西は本年の一月協定で妥協しまして伊太利をしてエチオピアのアチヌアベバの西の方に發展することを許した、一體エチオピアと云ふ所は面積は判らぬ、調べたものもない、一體あの邊の人口統計は嘘です、家を數へて家の五倍が人口だと云ふので丸で無茶です、面積などは全く判らぬ、佛蘭西はエチオピアのことも戦争後仲々聽かなかつたので、今度は獨逸の問題からして之を聴くことになつた、さう伊太利と仲宜くして共に獨逸に當らうと云ふのですが、伊太利としてはどうかと云ふとこちらで佛蘭西と喧嘩をせぬと云ふことは此問題で妥協しなければいけません、獨逸に當るかどうか、之は非常に込入つた問題であります、成る可く伊太利の外交としては佛蘭西を獨逸の喧嘩相手にして置くが宜い、獨逸と佛蘭西と喧嘩させて置いて自分は其虚に乗じて東南の方へ發展しやうと云ふのであります、ずるい考へです、どんなことをするかと云

ふと此アルバニヤの問題は佛蘭西との話が今年の一月出来たが、實は此話は去年からあつた、佛蘭西は伊太利に對して東南に自由行動を許す、斯う云ふことになつた、其代りこつちに於て提携しろと云ふのであるから、此虚に乗じまして本年アルバニヤへ艦隊を送りました、艦隊を送るならば一應警告をすべきであるが、何も言はずに送つた、アルバニヤは大に驚きまして動員令を出しました、けれども戦争にならずに終つた、今伊太利は武力を盛んに振廻して威嚇して居る、喧嘩ではない、威嚇して居る、さうして經濟利権を取りたい、伊太利は鐵はなし石炭はなし海には碌な魚はない、誠に物資の上から云ふと悲惨な國である、どうかしてこつちへ發展したい、經濟利権を得たいと考へて居る、今の伊太利の外交は佛蘭西を操縦して出来るならばあつちこつちへ發展しやう、喧嘩をすることは第二である、若し埃太利問題に付いて此問題で今後話が發展を見て所謂是れで佛蘭西が幾分か譲歩したならば、さうしたら提携するだらう、それでなければ此問題は佛蘭西と獨逸の喧嘩に任して置かう、伊太利のプランは大分ずるいプランですが伊太利のムツソリニーは又結婚政策をやつて居ります、それはどう云ふことかと云ふと大正五年十月にバルカンに於きまして伊太利は第三皇女ユアン内親王殿下を送りましてブルガリヤの國王の妃に致した、三番目の皇女の方で是れと提携した、最近伊太利の終の皇女を前の埃太利皇帝のカールの御子さんにオットーと云ふ人があります、此オットーは唯今廢后のチエツタンの教育を受けられました年齢は二十三位であります、之を中心としまして帝政を回復す

る、斯う云ふ計畫がある、前のカール皇帝の御子さんを以てハプスブルグ家を興して之を合併すると人口は丁度一千四百萬、さうしたいと云ふ考へがある、此所にも帝政派が澤山居ります、こつちにもあります、それを見込んで伊太利は去年の九月頃、伊太利の田舎の方でこつそりと話を進めたのであります、何しろ伊太利の皇室も前の奥太利の皇室も親類である、そこで此田舎の方でオットーが天下を取られるならば末の皇女を皇后にすると云ふ話があつた、是はどうしたかと云ふと、ルクセンブルグの女の王さんの御躰さんが饒舌つた、それで暴露したのであります、實際決つてしまつたか、どうか、今後の問題で分りますが、今では秘密にして居る、伊太利の考へでは獨逸が之を取るのを防ぐ途は外にない、二つを一緒にするに限る、之は打棄つて置けば獨逸がどうしても取る、斯う云ふのである、それに對して佛蘭西は獨逸が取るのはいやだけれども、併し伊太利の皇女を容れて伊太利の御躰さんの國になつて來ると一寸工合が悪い、自分の方は人口四千萬、伊太利も四千萬、之に勢力が加はることは欲せぬ譯であります、此問題がどうなるか、非常に面白い、若し帝政を回復するならば、昔の奥太利匈牙利帝國が出來るとしても決して土地を取るのではないと云ふ諒解を與へなければならぬ、其問題が佛蘭西と伊太利の間に話が付かぬ、獨逸がうんとやれば佛蘭西は讓るかも知らぬ、此問題がありますので唯今伊太利をして思切つて佛蘭西と共に獨逸と對抗するに至らしめない斯う云ふことになつて居る。

次に英吉利はと云ふと皆さん御承知の通りあの國は世界で千三百萬方哩の領土を有し、人口は四億三千萬を有して、もう世界の大部分を握つて居る、是れ以上もう要らぬ、隨つて其上に植民地は度々反對する、でございますから若し何か變動が起れば困る、何かやつたら困る、南阿弗利加あたりて今は一寸經濟問題で妥協して居りますが誠に面倒だ、アイルランドと致しましても獨立しまして議會に於て大多數で以て陛下に對して宣誓を止める、こんなことになつて居る、奥太利亞の方はさうでもないやうですが、どうもあつちこつちうるさい事ばかり、埃及が面倒、印度が面倒、それですから英吉利から云ふと平和が一番宜い、現状維持が宜い、丁度金持の隠居さんのやうである、英吉利は一方に平和を維持しつゝさうして商業を盛んにしたい、物を賣りたい、あの國は今商業は工合が悪くなつたから之れから進んで大にやりたい、何しろ歐羅巴方面は皆自分の得意先であります、それで英吉利は何とかして平和で事をやりたい、伊太利も今は思切つたことは出來ない、佛蘭西もさう云ふ強いことは出來ない、隨つて今後六國會議でどう行くかは分らぬが、恐らくは矢張り獨逸は不侵略を約束するだらう、西の方にも約束するが東に於ても約束する、さうして軍備の方も矢張りやらして貰うやうにするだらうと思ふ、さうして侵略はしないが併し之に背いた者に對して制裁を加へる共同行動はやらぬ、斯う云ふ約束をするだらう、さうすると其問題は半分役に立たぬものになる、さう云ふ形勢が來るだらう、軍備は恐らく獨逸はやるだらう、現に今でもやつて居るのだ、それで今後の問題はと云ふ

と、伊太利は佛蘭西とちやんと話を付けて行けば宜いが、それがはつきり付かぬと伊太利は主にこつちへ發展する、エチオピアの問題とかアルバニヤの問題もある、さう云ふ方面に大に活動するやうになる、佛蘭西は獨逸の力の増すのを好みませぬから一層やるだらう、是が今後の外交上重要な事だらうと思ふ、佛蘭西は此問題で譲るかどうか分らぬ、まだ何とも決めて居ませぬ、其問題が一つ、もう一つは露西亞です

露西亞は是は歐洲方面が斯う云ふ形勢になりますれば東洋方面には柔しくなる、と云ふのは露西亞の國が先頃實行した日本に對する北鐵の讓渡問題、あれなどは當然やる積りであつたらしい、自分の國外のものは棄てる、國內は少しも棄てぬ、斯う云ふ政策がスターリンの政策である、大體譲る積りであつたのでありますけれども、併ながらそれが背後の動きを色々見て居ると、どうも外の問題がむづかしくなると日本と妥協します、外の問題が柔しくなると日本に對して強くなる、斯う云ふ傾向がある、最近はと云ふと前申上げた通りポーランドと云ふ國が獨逸と妥協して露西亞の方へ向つて來る脅威がございますので、露西亞としては心配ですから、どうしても東洋の方へ向つては妥協して來るだらうと思ふ、もう一つの原因と申しますのは御承知の通り借金問題に關して露西亞と亞米利加との交渉が旨いかなかつた、是は御承知の通り大正十一年ゼネバの會議に露西亞が代表を送りますると日本も佛蘭西も英吉利も伊太利も皆一緒になつて貸した金を返して呉れと言つた、露西亞に對して貸

した金の總高は千百萬法です、それだけ返して呉れと言つたが向うでは返さぬ、あとで段々談判する向うでは假りに返すとしても日本とか英吉利とか亞米利加とか佛蘭西等が兵を出して露西亞を荒した、其出兵の損害が三億法、お前から借りたのは千百萬法、此方の損害は三億法、釣を呉れといつて此出兵の損害問題で仲々やかましかつた、所が亞米利加は一昨年十一月十六日の協定に於て此金は拂はない、亞米利加が露西亞に出兵したのは日本の野心を押へる爲めにやつたのだから三億法は拂はない、日本の野心を押へる爲めの出兵だから譯が違ふのだから拂はないと云ふことになつた、さうして以外の借金の支拂問題に付いて米露の談判が續いた、どんな風に進んだかと云ふと大分込入つたあとで亞米利加が申すには實は米國民の財産が、紐育の保險會社倉庫會社其他の財産が露國で沒收されたものが七億弗である、之を拂つて呉れと言つた、けれども仲々拂はないから遂にそれを負けてやつて亞米利加は露西亞に對して約一億五千萬弗、日本の金にして三億圓を拂うべしと言つた、露西亞はそれに對して色々談判して本年の一月に出した案は三億圓は高い、二億圓に負けて呉れ、之を亞米利加は聽きさうになつたが、其時露西亞が言ふにはそれには條件がある、二億圓とすると條件がある、此支拂は二十年間に拂う、其代り亞米利加は其倍の金を貸して呉れと言出した、それで旨いかなかつた、亞米利加は非常に怒り出して今度は露西亞の承認は止める、尤も正式ではない、國際法の正式承認は取消しませぬが、實際に於ては取消して居るやうな有様で、仲は喧嘩になつて居る、此亞

米利加と仲が悪くなつたと云ふこと、獨逸ポーランドと悪くなつたと云ふこと、二つ一緒に居る、是が東洋に向つて露西亞が最近妥協に傾いて來た原因であります、それであるから最近亞米利加と悪いと云ふこと、歐羅巴が不安であると云ふことが露西亞を牽制して東洋方面の外交には餘程宜いと思ふのであります、其點から言ふと漁業權の問題も幾分宜いか知らぬ、併し是も簡單にはいかぬ、相當やかましい曲折を経ることと思ふが、大體として歐羅巴の形勢の悪いと云ふことは露西亞に取つては東洋に妥協する原因になると思ふ。

それから今一つは伊太利が今後何をすたらう、土耳其は今軍備をやつて居る、伊太利が此アドリヤ地帯に軍備を持つて居る、之を土耳其が心配して居る、其外にエチオピヤは伊太利に對して最も心配をして居る、さう云ふ様な外交が今後どうなつて行くか、注目すべき點であらうと思ひます、其他に宣傳とか何とかいふ問題に付きましても露西亞も幾分斯うなつて來ると柔かになると思ひます、ただ色々ありますけれども餘り長くなりすから最近の御話は此位にして置きます。

東京工商會議所刊行
産業合理化資料

號	標	題	實費
一	獨逸に於ける合理化運動と獨逸産業合理化協會		(二〇錢)
二	商業標準化事業と其價值		(四〇錢)
三	流動作業に關する經驗		(五〇錢)
四	米國に於ける間接費の研究		(三〇錢)
五	木製包装の合理化		(三五錢)
六	郵便小包の包装及發送		(三五錢)
七	輸出取引の仕方		(三五錢)
八	豫算による企業統制		(三五錢)
九	配給の方法		(二〇錢)
一〇	事務所の騒音防止方法		(一〇錢)
一一	厚紙包装の合理化		(三五錢)
一二	包装用器具及び安全裝置		(三五錢)
一三	米國に於ける恩給制度の研究		(三〇錢)
一四	商品の回轉率と手許在高の統制		(一〇錢)
一五	職長の資格		(三五錢)
一六	卸賣取引方法と其の代金取立に就て		(二〇錢)
一七	筋肉労働者に對する基礎賃率の決定		(二五錢)
一八	會社の重役及幹事の職務		(二五錢)
一九	販賣員の訓練		(二五錢)
二〇	中央配達制度による經費節約		(一〇錢)
二一	産業上の適職選擇		(三五錢)
二二	試力製及び金屬製包装の合理化		(三五錢)
二三	實業界に於ける大學卒業生の採用と其の適所選擇		(一〇錢)
二四	壓縮空氣設備の設計と運轉		(二五錢)
二五	組織及び操作諸原則		(三五錢)
二六	製造業に於ける出資の統制		(二〇錢)
二七			
二八	經濟的水平運搬の基礎		(一圓)
二九	手力車輛		(四〇錢)
三〇	販賣配給費の計算方法		(一〇錢)
三一	生産豫算及び手許在高豫算		(二〇錢)
三二	團體的獎勵法と個人的獎勵法		(四〇錢)
三三	不景氣が労働に及ぼす影響を最小にする方法		(三五錢)
三四	機械的動力傳達裝置		(二五錢)
三五	海上運送用包装		(五〇錢)
三六	給油の合理化		(五〇錢)
三七	貨銀支拂事務の管理		(四〇錢)
三八	顧客應待の訓練		(五〇錢)
三九	軌道に依らぬ小距離水平運搬		(四〇錢)
四〇	第三部(機械的運轉の運搬車輛) 圖表計算		(六〇錢)
四一	最新自動車修繕工場		(四〇錢)
四二	營業費の豫算作成に就て		(二〇錢)
四三	機械の輸出販賣に就て		(四〇錢)
四四	原價計算の基礎案		(五〇錢)
四五	住宅の熱消費の研究		(一圓)
四六	統一簿記—機械製造工場用—		(一圓)
四七	經濟性の計算方法		(三〇錢)
四八	營業用輕便運搬設備		(五〇錢)
四九	工程管理		(五〇錢)
五〇	工場に於ける寸法の測定法		(五〇錢)
五一	特殊計算尺		(五〇錢)

(所議會當・すまし致布頒費實はに方の望希御物行刊所當)
(要不料送)いさ下用利御を番一九七六一京東座口替換

東京商工會議所刊行
商工調査

號	標	題	實費
一〇八七六	六	商工會議所の議題に對する意見 健康保險法改正意見並に參考資料 中小商工業の金融逼迫に關する資料 東京市及び其の附近に於ける家内工業の情態	(三五錢) (六〇錢) (一〇錢) (五〇錢)
一一〇	一	東京地方電氣料金に關する調査 株式取引所限月問題に關する調査 保證準備擴張問題に關する參考資料 金輸出解禁に關する參考資料要項 中央銀行の組織及金融市場との關係 支那改訂輸入税率表 中小商工業金融と我國金融機關の現狀	(二五錢) (六〇錢) (三〇錢) (一〇錢) (二〇錢) (二五錢) (三五錢)
一二〇	二	我國に於ける百貨店對小賣商問題に關する調査 歐洲戰後本邦貿易の趨勢 配當課税問題に關する參考資料 國民負擔輕減に關する參考資料 購買組合に關する調査 不正競争の取締に關する調査 海外市場需要本邦商品調査 我國に於ける生産並販賣の統制現狀 中華民國新舊關稅率對照表 解雇手當に關する調査 最近世界海運狀況 賠償及戰債支拂猶豫問題と世論 失業保險法とその實施狀態 獨逸及獨逸の財政狀態 獨逸兩國の爲替管理並資本逃避防止に關する法令	(三〇錢) (四〇錢) (三〇錢) (一〇錢) (三〇錢) (四〇錢) (二五錢) (二五錢) (二五錢) (二五錢) (二五錢) (二〇錢) (二〇錢) (三〇錢) (七〇錢)
一三〇	三	金本位制停止後の英國財界 各國爲替管理令 購買組合の受くる寵遇と商工業者の蒙る壓迫 インフレーションに關する調査 第一卷(壘國諸産業に及ぼしたるインフレーションの影響) 第二卷(大戰中獨逸に於けるインフレーションの情勢) 第三卷(佛國のインフレーションとフラン貨の安定) 第四卷(インフレーション時代に於ける利益配當の方法) 第五卷(貨幣價值下落期に於ける資金調達と價格決定の方法) 第六卷(假裝利益に對する課税方法) 第七卷(大戰後獨逸に於けるインフレーションの概觀) 獨逸に於ける新カルテル法令と價格取締令 獨逸小賣商保護法及關係法規 伊太利に於ける公衆販賣業並行商取締に關する法規 英國植民地の織物輸入割當制 新興産業に關する調査 輸出統制の改善問題 支那の經濟恐慌に關する調査 第一卷(金融及國際貸借)	(三〇錢) (一〇錢) (一五錢) (二五錢) (二五錢) (二五錢) (六〇錢) (一五錢) (二〇錢) (三〇錢) (二五錢) (二〇錢) (二〇錢) (二〇錢) (二〇錢) (二〇錢) (二〇錢) (二〇錢)

(所議會當・すまし致有煩費實はに方の望希御物行刊所當)
(要不料送) いさ下用利御を番一九七六一京東座口替振

東京商工會議所刊行
資料

一	米國最近の經濟情勢 (國田三朗講演) 殘部無し	(十錢)
二	我國の新興産業に就いて (天野健雄講演) (十錢)	(十錢)
三	人絹工業の近狀 (佐羽太三郎講演) (十錢)	(十錢)
四	日歐貿易の趨勢 (竹内謙二講演) 殘部無し	(十錢)
五	躍進する我國の羊毛工業 (楠本吉次郎講演) (十錢)	(十錢)
六	統制經濟と獨占 (竹内謙二筆) (十錢)	(十錢)
七	日本セメント工業發展史 (諸井貫一講演) (十錢)	(十錢)
八	世界經濟叢報第一輯(十錢) 我國製粉業の發達 (加藤雄雄講演) (十錢)	(十錢)
九	シカゴ市に於ける交通統制の經過 (十錢)	(十錢)
一〇	日本經濟最近の動向 (竹内謙二講演) (十錢)	(十錢)
一一	セメント工業の現在及將來 (五錢)	(五錢)
一二	我國莫大小工業の發展性 (十錢)	(十錢)
一三	珪瑯鐵器工業の進出 (五錢)	(五錢)
一四	西蔵の資源と邦品進出の可能性 (多田等觀講演) (十錢)	(十錢)
一五	海外に雄飛する日本陶磁器工業 (十錢)	(十錢)
一六	最近に於ける自轉車工業の發展 (五錢)	(五錢)
一七	輸出進展を續くる日本電球工業 (五錢)	(五錢)
一八	北地鐵次郎講演(五錢)	(五錢)

一九	朝鮮經濟事情に就いて (穂積眞六郎講演) (十錢)	(十錢)
二〇	最近の中南米經濟事情に就いて (首藤安人講演) (十錢)	(十錢)
二一	ペルシヤの文化と經濟 (笠間果雄講演) (十錢)	(十錢)
二二	世界經濟叢報第二輯(十錢) 三米國ニューデイルの發展と貿易事情 (松本正雄講演) (十錢)	(十錢)
二三	臨時利得稅法綱要 (十錢)	(十錢)
二四	最近歐羅巴事情(米田實講演) (十錢)	(十錢)

定期刊行物	東京商工會議所刊行	實費
景氣時報(月刊)	(十錢)	(十錢)
東京物價月報(月刊)	(十錢)	(十錢)
重要經濟統計月報(月刊)	(三十五錢)	(三十五錢)
世界經濟統計(年四回)	(二十五錢)	(二十五錢)
東京商工會議所統計年報	(昭和八年度) 殘ナシ	
中華民國及滿洲國貿易統計表	(昭和九年度) (八十錢)	(八十錢)
東京物價及賃銀統計	(昭和九年度) (十五錢)	(十五錢)
商工年鑑	(十圓)	(十圓)
	(改造社發賣)	

×	昭和十年五月七日印刷	×
×	昭和十年五月十一日發行	×
×	東京市麹町區丸之内三丁目十四番地 東京商工會議所	×
×	東京市京橋區京橋三丁目八番地 印刷人 天野健雄	×
×	東京市京橋區京橋三丁目八番地 印刷人 小紫與三郎	×
×	東京市京橋區京橋三丁目八番地 印刷所 若松印刷所	×
×	東京市丸の内三丁目十四番地 發行所 東京商工會議所	×
×	電話丸之内(四) 三五・三六・三七 振替口座東京 一六七九一番	×

終

